

にぎやかな放流

2009年秋 放流会

ひんやり寒い朝、高速のトンネルを抜けると乳白色の世界だった。山塊に囲まれたインターチェンジのある町は霧に沈んでいた。しかし峠をこえたあたりから霧の上に出たようで、青空が見えてきた。
(これなら紅葉も放流も楽しめる)と僕は思った。ただ、ここ最近雨が少なかったから、山の紅葉の具合と川の水位が気になるところだった。

集

合場所の道の駅にはすでに多くの車が停まっていたが、それは放流参加の仲間ではなかった。紅葉を見に来た人たちの車ばかりだった。きつとこの山間部の一帯では一年でこの紅葉の時期が一番賑わうのだろうと、そう思った。

他の参加メンバーや漁協のトラックを待つ間、いくらか集まった仲間との間で交わされるのはやはり今年の釣りのことだった。どこそこの川がどうだったとか、あそこは今年がダメだったとか。



少ない水量を杞憂しながら放流です。

ぱつとしない話が多いが、果たして良かった話も同じようにあればしていただろうか？ この時点ですでに来シーズンへ向けての水面下での牽制が始まっているのかも知れなかった。
少し待って残りのメンバーと漁協のトラックも到着した。トラックの荷台のタンクをのぞいて、「おおっ！でかい！」と声を上げた仲間がいた。それはまるで今年の釣りで縁がなかった良型に対する嫉妬のように聞こえた。



これなら今のサイズで釣れても嬉しいです。

様々な情報は一言たりとも逃すまいとしていた。

不

意に水面に気配を感じた。ライズだ。今し方放流したヤマメがもうライズを始めた。それは必ずしも水面のなにかを捕食しようとしてライズではないかもしれない。ただ生まれて初めて自然の川に放たれたヤマメがライズするその姿にみんなが足を止めた。来年の釣りの戦略よりも今はこのヤマメを見送ろうと、誰もがそう思った。

紅

紅葉がはらはらと舞い散っていた。地面にもびっしりと敷き詰めものキャンプ場。ここでまた多くのメンバーが合流し、昼食にゲームに釣りの話にと盛り上がる。

中には初めて会う人、何年ぶりかという人、一年に一度ここでしか会わない人も。そんな人たち同士もいつの間にか何のわだかまりもなく話している。また落ち葉が舞い、ついさつき川に放たれたヤマメを思い、そして林間の一角に笑い声が響いた。

(十一月八日 芸北にて)



再会を期待して。でもここじゃ釣れないなあ。

幾

つかのポイントへ移動しながらヤマメを放流していった。そのポイントの度に放流の面々に来年の釣りをイメージしている様子がうかがえる。

「この支流はどうなんだろう？ 知ってる？」と探りを入れて、
「良い時期に入れば良いと思うけど、今年も入ってないからなあ」とやんわりと受け流したり。釣りはもうこんなところから始まっている。

漁協の人の話にも旺盛に耳が行く。すでに魚を入れた場所とか釣りを取り巻く